

Q/I-implicatureと関連性

大津, 隆広
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/6796475>

出版情報：言語科学. 32, pp.133-143, 1997-02-26. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン：
権利関係：



Q/I-implicatureと関連性

大津隆広

1. 序

Grice (1975)の流れをうけて、Levinson (1987)を含めたneo-Grice派は一般化された会話の含意(*generalized conversational implicature*)を理論的に説明しようとした。その試みの中で特筆すべきことは、協調の原則の中の量の格率(*quantity maxim*)の2つの格率から生じるQ-implicatureとI-implicatureが互いに衝突しあう含意であることを指摘し、その解決の枠組みを提示したことである。一方、Carston (1995)は関連性という一つの語用論的原理を用いて、2つの含意の区別なく、また一般化された含意、特殊化された(*particularized*)含意にかかわらず、あらゆる含意のあり方を統一的に説明できるとする。

拙論では、関連性理論そのものは魅力的ではあるが、その原則に立ち戻った時、CarstonではLevinsonが挙げたQ/I-implicatureをその理論に即して説明することができないことを指摘する。

2. Q/I-implicatureの枠組みと問題点

2.1 Levinson (1987)の主たる提案は、Grice (1975)の量の格率(1)の2つの格率a、bに基づく推論が異なる性質を持つことの指摘と、一般化された会話の含意の理論化にある。

(1) 量の格率¹

- a. 会話の貢献において必要な情報はできるだけ多く与えよ。
- b. 会話の貢献において必要以上の情報を与えるな。

Levinsonは量の格率(1)aからQ-implicature、(1)bからI-implicatureという異なる含意がそれぞれ生じると主張する。2つの含意が導かれる過程を簡単に説明するとそれぞれ次のようになる。²

- (2) a. 1. "Some of the miners voted for Thatcher."
- 2. Not all of the miners voted for Thatcher.
- [A(S) ⊢ A(W)] [A(W) + > ~A(S)]

1) Grice [1975, p45] 参照。

2) 使用した記号はLevinson (1987)に準ずる。⊢ は "entails" (論理的に含意する)、+ > は "con conversationally implicates" (会話的に含意する) を表わす。また、A(S)は情報量の点で strongerな任意の文、A(W)は weakerな任意の文を表わす。

- b. 1. "If you mow the lawn, I'll give you \$5."
 2. If and only if you mow the lawn, I'll give you \$5.

→ [A(S) ⊢ A(W)] [A(W) +> A(S)]

まず、Q-implicatureとは体系化・慣習化された含意で、スケールを表わす語や対比のセットをなす語句と関係している。そこでは、strongerな表現がweakerな表現を論理的に含意するという関係が成り立っている。例えば、(2a)の"some"、"all"というスケールをなす語を例にとると、情報量（仮にここではそのように呼ぶが）の点で"all"がstronger、"some"がweakerな表現である。そのような関係のもとで、weakerな表現(2a)(1)を用いることは、(2a)(2)のようにstrongerな表現が当てはまらないことを会話的に含意することになる。話し手は自分の責任においてもっとも情報量の多い陳述を行い、聞き手も話し手がそうした原則を守っていると信じていることになる。

これに対し、I-implicatureとは、strongerな表現とweakerな表現の間の同様の論理的な含意関係のもとで、weakerな表現を用いることによりstrongerな表現が導き出される含意のことである。これは推論という作業を通して情報量の少ない内容から情報量の多い内容へ情報量を拡張するやり方に他ならない。例えば、話し手は(2b)(1)を用いることで聞き手に(2b)(2)の解釈を期待することになるし、聞き手も(2b)(1)を聞けば自然とそのように解釈する。

さらに、Levinsonは量の格率から生じるQ-implicatureとI-implicatureが互いに衝突する含意であることを指摘する。含意を導く推論の性質を比べると、Q-inferenceとI-inferenceという2つの推論はその方向性が逆のように見えるからである。したがって、この2つの異なる推論を関連したものとして捉えるためには(3)の枠組みを立てることが必要になる。³

- (3) 1. 同一の意味関係に関して等しく簡潔であり、等しく語彙化された言語表現であるスケールをなす語や対比のセットがある場合には、Q-implicatureがI-implicatureに優先する。
 2. 3の場合を除いて、1以外のすべての場合には、I-principleが典型的で特定の解釈を導きだす。
 3. 形式において、有標なものと無標なものが同じ意味を表わしうる表現として存在する場合、無標な形式はそれ自体でI-implicatureをもつが、有標な形式はI-implicatureが適用されないことを含意(Q/M-implicate)する。

3) Levinson [1987, p71] 参照。

3つの含意の算出の仕方を簡単にまとめると次のようになる。

- (4) 同一の意味関係において、対比のセットをなす語彙化された語の場合には、Q-implicatureが先に導き出される。さらに、形式において有標、無標というペアがある場合には、有標の形式によりQ/M-implicatureが導き出される。以上の2つの推論が適用されない場合には、I-principleにより、典型的で特定の解釈が導き出される。⁴

2.2 Levinsonの問題点を指摘する前に、2つの含意を例をQ-implicature (5)、I-implicature (6)としてさらに挙げてみよう。

- (5) a. "Bill has written three books."
 + > Bill has written no more than three books.
- b. "John is a poet or a philosopher"
 + > (i) John isn't both a poet and a philosopher.
 (ii) The speaker doesn't know whether John is a poet.
 (iii) The speaker doesn't know whether John is a philosopher.
- (6) a. "John turned the key and the engine started."
 + > (i) He turned the key and then the engine started.
 (ii) He turned the key and thereby caused the engine to start.
 (iii) He turned the key in order to make the engine start.
- b. "John unpacked the picnic. The beer was warm."
 + > The beer was part of the picnic.
- c. "The baby cried. The mummy picked it up."
 + > 'The mummy' was the mother of the crying baby.
- d. "John said 'Hello' to the secretary, and then he smiled."
 + > John said 'Hello' to the female secretary, and then he (John) smiled.

⁴) Levinsonと異なり、Ariel [1994, p7] ではQ-principle、M-principle、I-principleの順にその適用順序を明確化している。有標の形式は、Q/M-implicature (あるいはM-implicature) により典型的ではない解釈を得ることになる。例えば、"amanuensis"という有標の語彙を使用することで、"secretary"という無標の語彙からは出てこないmale secretaryという含意が生じるとする。Arielは、この含意を導くためにはQ-implicatureとM-implicatureの双方が関わっていると述べている。LevinsonのQ/M-implicature、ArielのM-implicatureはともに形式の問題であるので、拙論では議論しない。

- e. "Harry and Sue bought a piano."
+ > They bought it together, not one each.
- f. "John pushed the cart to the checkout."
+ > John pushed the cart full of groceries to the supermarket
checkout in order to pay for them, etc.
- g. "John came in and he sat down."
+ > John came in and he, John, sat down.

Levinsonの大きな問題点はI-implicatureの算出の過程にあると言える。(3)の枠組みはQ-implicatureとの衝突を避けるため、Q-principleからI-principleの順に適用されるように提示されたわけであるが、むしろそれが推論のありかたをおかしなものにしている。論理的含意に関わる2つ表現の性質を比較すると、Q-implicatureではstrongerな表現とweakerな表現は等しく語彙化されているのに対して、I-implicatureの場合には両者は語彙ではなくむしろ概念である。例えば、(2)bにおける"if"からif and only ifへの情報の拡張は、語彙というよりも概念の拡張であると考えられる。⁵⁾

さて、(3)に従いI-implicatureが算出されるためには、まずQ-implicatureの査定が行われなくてはならない。それは、2つの含意の算出に同じ論理的含意が関わっているということを示唆させる。しかし、上述のとおり論理的な含意関係の性質は異なるわけだから、両者の査定が連続して行われるという主張は弱いものになるであろう。言い換えれば、I-implicatureが最初から査定されと考えることを阻止する理由とは何なのであろうか。この疑問に適切な答えを見つけることができなければ、2つの推論の適用が連続してなされると考えることには無理があるであろう。また、I-implicatureの場合に、strongerな表現（つまり、情報拡張の到達点）が確定していないのに、情報の拡張が生じるというだけでは（言い換えれば、(3)の枠組みにより推論過程を単純化するだけでは）、最も重要な拡張の仕組みが説明されていないことになる。

Levinsonの次の問題点は、I-implicatureの性質の一つとして、多種多様な推論を一つの推論形式に押し込めてしまったことである。I-implicatureという分類のもとで、(6)から導き出される解釈はすべて典型的で特定の解釈であり、

⁵⁾ I-implicatureは、「任意のweakerな表現 A(W)と任意のstrongerな表現 A(S)のペアが、『A(S)がA(W)を論理的に含意する』という関係で同じ意味領域にあるとき、当然とされていることがらと一致するのであれば、A(W)を主張することはA(S)を含意することになる」(Levinson [1987, p65])という一般的な形式をもつ。しかし、これは語彙に関して述べているのではない。

含意されるものは発話の明示的な内容(what is said)のサブ・セットであるとされる。⁶ しかし、明示的な内容の特定化のされかたが(6)b、(6)cと他の例では異なる。前者の2つのI-implicatureである、The beer was part of the picnic、'The mummy' was the mother of the crying baby はそれらの発話によって実際に伝達される含意ではなく、発話の結論となる含意を導くための前提として働く含意である。

次に、本質的な問題である、表現に関して用いられたstronger/weakerという概念について考えてみよう。Levinsonが定義するように仮にそれを情報量の強弱だと捉えると、(6)のいくつかの例の妥当性が説明できなくなる。例えば、(6)b、(6)cにおいて、"John unpacked the picnic. The beer was warm."、"The baby cried. The mummy picked it up."という表現と比べて、それらを主張することにより生じるThe beer was part of the picnic. 'The mummy' was the mother of the crying baby. という解釈の情報量がどれくらい多いと言えるのだろうか。また、stronger/weakerという概念が特定性／一般性を表わすと考えてみても、その概念の意味は明確にはならない。I-principleにより導き出される解釈について考えると、意味内容は確かにより特定のなものへと拡張されていると言える。しかし、(2)aの"some"と"all"と同様に、(5)aの"three"と"four"以上の数字、(5)bの"or"と"and"の間にはそうした関係は成立しない。むしろ、Q-implicatureとして導き出された命題の意味内容そのものが、明示的内容に比べて特定化されているという直観が働く。例えば、(5)aではBill has written no more than three books. という命題としての特定化が行われている。すなわち、Q-principleによる拡張にせよI-principleによる拡張にせよ、発話内容の特定化は生じていると言える。言語の伝達において、特定の文脈があろうとなかろうと、聞き手の解釈は話し手の発話を特定化することにより行われる。すべての発話の意味解釈がI-principleによりなされると考えてもおかしくはないであろう。⁷

また、Levinsonは、I-principleの特徴として、「拡張された解釈は典型的な予測と合致した最も特定の解釈となる傾向がある」と、導出される解釈のス

6) Levinson [1987, p66] 参照。

7) 情報の拡張の特徴がstrongerな表現の否定に基づくということでQ-implicatureに関わる推論を取り立てて区別することがそれほど重要なことであろうか。例えば、(2)bにおいて語用論的に導き出される、"If you don't mow the lawn, I won't give you \$5."という誘導推論がどちらの推論過程に分類されるのかなどたいした問題ではないと思われる。

テレオタイプ性 (stereotypicality) について述べている。⁸ それにより(6)aでは、出来事の「時間順序」、「因果関係」、「目的関係」の3つの典型的な解釈が生じることになる。また、(6)の他の例でも複数の解釈が導き出される。しかし、典型的な解釈が複数存在するというのは疑問である。

以上の点から、Q/I-principleの適用の連続性とI-implicatureの多種多様性を主張する限り、Levinsonの枠組み(3)は発話の解釈を自然な形で説明したものであるとは考えられないと言える。

3. Carston (1995)の関連性理論

3.1 Carston (1995)は自然言語における推論を説明するのにSperber and Wilson (1986)の関連性という一元的な概念を用い、その一つの語用論的原則を用いれば、心理的に健全な形で発話解釈を説明できるとする。

旧来の語用論が語用論的推論により伝達される意味内容のすべてを含意(implicature)として取り扱ってきたのに対して、関連性理論ではそれを明意(explicature)の一部であるとする。Carstonは、そうした関連性理論の独自の立場からLevinson (1987)の問題点を指摘している。それに従えば、(6)b、(6)c、(6)gで派生されるとされるI-implicatureは実際には含意ではなく、言内の意味の一部であるとなるであろう。それらを(7)b、(7)c、(7)gとして繰り返す。

- (7) b. "John unpacked the picnic. The beer was warm."
+>The beer was part of the picnic.
- c. "The baby cried. The mummy picked it up."
+>'The mummy' was the mother of the crying baby.
- g. "John came in and he sat down."
+>John came in and he, John, sat down.

(7)b、(7)cのそれぞれの含意とされるThe beer was part of the picnic、あるいは'The mummy' was the mother of the crying baby は定冠詞を用いることでなされる語用論的推論の中の一つであり、(7)gの含意とみなされているものも人称代名詞を用いることによる語用論的推論の一つに過ぎない。Levinsonは語用論的推論により生じる意味をすべて含意として処理したためにI-implicatureを雑多なものにしてしまったとも言える。

これは、他のI-implicatureの例である(6)d、(6)fにも実は言えることである。それを(8)d、(8)fとして繰り返す。

8) Levinson [1987, p66] 参照。

- (8) d. "John said 'Hello' to the secretary, and then he smiled."
 + > John said 'Hello' to the female secretary, and then he (John) smiled.
- f. "John pushed the cart to the checkout."
 + > John pushed the cart full of groceries to the supermarket checkout in order to pay for them.

(8)dでは"secretary"がもつ百科全書的知識である"the female secretary"も含意ではなく明意である。(8)fにおいても、導出される含意とされているものは、"John pushed the cart to the checkout"という言内の意味がフレームやスクリプトに関する語用論的推論の助けを借りて補充された明意であり、含意ではない。このような考え方をすると、繁雑な集合に見える Levinson の I-implicature の例がある程度は整理される。

また、Carston は I-implicature のステレオタイプ性という特徴にあわせないような例(9)a、bをも関連性により説明できるとする。

- (9) a. He opened the door and she handed him the key.
 b. If you don't pick up the garbage I'll make you a cake.

簡単にアクセスできるメンタル・スクリプトは、(9)aでは情報提示とは逆の順序（つまり、「渡されたキーを使ってドアを開ける」）、(9)bでは人間社会の自然なやりとり（つまり、「ごみを拾えばほうびがもらえる」）である。しかし、実際にそうした典型的な行為の順序や人間関係は(9)a、bからは処理されないもので、I-principleではこれらの例を説明することができないことになる。⁹しかし、関連性という概念を用いれば、(9)は関連性が低く処理されにくい発話にすぎず、使用が不可能ではないことを説明できる。

3.2 次に、Carston (1995)による Sperber and Wilson (1986)の関連性理論の枠組みを用いた Q/I-implicature の説明を検討する。その前に、関連性理論の枠組みそのものを概観してみよう。

Sperber and Wilson の関連性理論において、ある特定の文脈で、ある想定(発話)が述べられることにより何らかの文脈効果(文脈に与えられる何らかの効果)をもつ場合、その想定は関連性をもつと定義される。関連性は程度性という側面をもち、関連性の高低は文脈効果と処理労力の釣り合いにより測定され

⁹ Levinson の枠組みにおいて Q/I-implicature が導出されるためには、「異論の余地のないこと、当然と思われていることと矛盾しない場合」という条件があり、この例ではそれに反するので I-implicature は派生されないと処理される。Levinson [1987, p64] 参照。

る。関連性の程度条件を(10)に挙げる。¹⁰

- (10) 1. 発話を解釈することによって得られる文脈効果が大きいほど、その想定に関連性は高い。
2. 発話を解釈するのに必要な処理労力が小さいほど、その想定に関連性は高い。

関連性理論の主張は、人間の認知活動は最小限の処理労力を使って可能な限り多くの文脈効果（ここでは文脈含意しか考えない）を生み出す、つまり関連性を最大にするという目的により行われているということにある。このように、解釈に必要な処理労力は最小限で済むという最適な関連性の保証こそが関連性理論(11)である。¹¹

- (11) すべての顕示的伝達行為はその行為自体の最適な関連性を見込みを伝達する。

Carstonは、関連性という認知に関わる柔軟な一つ概念を用いることにより、繁雑な(2)b、(6)の例を首尾一貫して説明できるだけではなく、同様にQ-implicatureに関わる推論をも説明できる点で優れていると述べる。まず、I-implicatureの例(12) ((6)aの類例)においてその説明を追ってみよう。

- (12) a. Susan turned the key and the car started.
- b. Susan turned the key and then the car started.
- c. Susan turned the key and as a result the car started.
- d. Susan turned the key in order to make the car start.

(12)aの発話を聞いた人が、キーを回すことと車が走るという2つのことに関する一般的な知識（出来事の時間順序、因果関係、目的関係）を想起するのに必要な処理労力はわずかなものであり、われわれにとって関連のある(12)b-dのような文脈含意をもつ。また、(2)b、(6)の例に関しても、選択された解釈は大した処理労力もかけずに生じる関連性の高いものだと考える。

さらに明言はしていないが、(2)aと同様に一般化された含意であるQ-implicature(13)においても、メンタル・レキシコンの中にある"some"の意味にアクセスすれば、"some"から"not all"という文脈含意を引き出すためには最小限の処理労力で済むことになると説明されるであろう。

- (13) a. Mary failed some of her exams.
- b. Some of the arguments are convincing.

¹⁰) Sperber and Wilson [1986, p125] 参照。

¹¹) Sperber and Wilson [1986, p158] 参照。

また、“not all”へデフォルトな推論がなされない一般化された含意(14)のような例をも、関連性により説明が可能となるであろう。

- (14) a. Some birds flew past the window.
b. I'd like some apples please.

Carstonの次の主張は、関連性をもってすれば(12)-(14)のような一般化された含意のみならず、特殊化された含意をも説明できるということである。後者の含意の例として(15)を用いる。

- (15) A: If anyone of the students have failed I'll be in trouble.
B: I'm afraid some of them have.

発話時においてAにとって最も関心のある情報は、その数如何によっては自分が困るという状況に陥ることになるという理由で、失敗した学生の数が一人以上いるかどうかということである。したがって、Bの返事の中の、“some”は not all (of the students have failed)という含意を伝えようとしたのではなく、「失敗した学生がいた」ことを伝えていると解釈される。“not all”を導き出す推論が働かないのは、それが最適な関連性の見込みをもたないからである。

4. Carston (1995)の問題点

Carstonの説明は一見して妥当なもののように見えるが、説明の中心が「発話内容の処理に必要な労力」という点に絞られているところに問題がある。

さて、Levinsonの例をSperber and Wilsonの関連性という概念で捉え直すためには、いくつかの点を考慮する必要があると思われる。まず、想定とは意図を明白にしようとして顕示的に伝達されたものであるという仮定が必要である。また、文脈含意とは、聞き手がそもそももっていた想定（文脈）に話し手の新しい想定（発話内容）が加わることによりなされる推論の結果導き出されたものであり、古い想定の存在が前提となる。

以上の関連性理論の枠組みにおいて、先程の(15)Bの発話はAにとって十分顕示的な刺激として働き、文脈含意がもたらされることによりAの認知環境が変化した例であると言える。Aの発話は、Bの発話を聞く前に想定としてA自身ももっていたものの一つであると言える。そして、Bの“I'm afraid some of them have.”という新しい想定を耳にすることにより、Aは Then I'll be in troubleという文脈含意を得るのである。この文脈含意を引き出すのに必要な処理労力は少なくてすむので、Bの想定は関連性が高いことになる。

しかし、Carstonが説明に用いたLevinsonのQ-implicatureの例(2)a、(5)ではそうした古い想定が確定できず、Sperber and Wilsonの関連性という概念を用いて理論的に捉えることは難しい。確かにCarstonが言うように最小限の処理労

力を使うだけで(13)aの想定を聞けば、Mary didn't fail all of her exams. という解釈を規則的に得ることができる。しかしこれがどの程度の文脈含意をもつか（従って、どの程度の関連性をもつか）が決まるためには、それを査定する文脈が必要になる。(14)も同様である。

この主張はI-implicatureの例(16)(=12)に関するCarstonの説明にもあてはまる。

- (16) a. Susan turned the key and the car started.
b. Susan turned the key and then the car started.
c. Susan turned the key and as a result the car started.
d. Susan turned the key in order to make the car start.

Carstonは、(16)aの想定が関連性をもつのは、(16)bでは時間順序、(16)cでは因果関係、(16)dでは目的関係といった文脈含意が生じるからであり、一般化された会話の含意の場合は「最小限の処理労力」という基準を満たせば関連性があると述べている。しかし論点がそれだけでは、Sperber and Wilsonの関連性理論をことさら持ち出す必要はなく、Levinson (1987)の(3)の枠組みで十分説明可能であろう。前述したようにI-principleの特徴は典型的な解釈をうみ出すことであり、典型的な解釈とは少ない処理労力で容易に導き出せる解釈に他ならないことを示唆しているからである。いずれにしても、(16)aがどのような想定 of the collection of assumptionsの中で用いられたのかが規定されなければ、関連性を議論することはできない。(2)b、(6)も同様である。¹²⁾

しかし、一方では(16)b-dの文脈含意を得るために必要な処理労力には差があるという直観を否定することはできない。同じ条件では、(16)bよりも(16)c、(16)cよりも(16)dの順にそれらの含意を導き出すのは難しいと言える。そして、それぞれが最適な関連性を達成すると考えれば、それらの解釈がもつ文脈含意も同様の順序で大きくなることが予測される。処理労力を相殺するだけの文脈含意の導出が保証されることが関連性理論の主張だからである。このままでは、(16)b-dの違いを明確にできないLevinsonのステレオタイプ性という概念に対して、処理労力の大小が直観的に理解されるにもかかわらず、それらを関連性理論では説明できないことになる。

Levinsonが一般的化された会話の含意の理論化を目指したのに対して、関連性理論は日常の言語・非言語的伝達の仕組みを解明しようとするため、説明の対象は特殊化された会話の含意に絞られる。最適の関連性を達成するという不

¹²⁾ Q/M-implicatureに関しても、CarstonはLevinsonの「典型的な解釈」を「処理労力をあまりかけずに導出できる解釈」と言い替えているにすぎない。Carston [1995, p236] 参照。

可避的な原理に従えば、われわれは最小限の処理労力で望ましい解釈を取り出すことができるという関連性理論の主張は興味深い。しかし、想定のある集合である文脈が確定できない状況で用いられた発話に関して、関連性そのものを査定することができないことは事実であろう。関連性理論を用いたCarstonは、Levinsonの一般化された会話の含意を説明することはできていない。

5. 結語

Sperber and Wilson (1986)の関連性理論のほうがLevinson (1987)の枠組みよりも含意一般をはるかに心理的に健全な形で説明できることは間違いのないであろう。しかし、一般化された会話の含意に関して、Carston (1995) および関連性理論では文脈に新しい想定が加わることなく文脈含意が生じる過程を説明できない。そうした認知環境を変えずして文脈含意を得ることができる発話の例は他にもあるだろうが、どのようにそれらを関連性理論が説明できるのかが問題である。

参考文献

- Ariel, M. 1994. Interpreting Anaphoric Expressions: A Cognitive versus A Pragmatic Approach. *Journal of Linguistics* 30. 3-42.
- Carston, R. 1995. Quantity Maxims and Generalised Implicature. *Lingua* 96. 213-144.
- Grice, P. 1975. Logic and Conversation. In Cole, P. & Morgan, J. L. (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Act* 41-58. Academic Press.
- Gundel J. K., N. Hedberg, and R. Zacharski 1993. Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse. *Language* 69:2.
- Horn, L. 1985. Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature. In Schiffrin, D. (ed.) *Meaning, Form and Use in Context*. 11-42. Georgetown University Press.
- Levinson, S. C. 1987. Minimization and Conversational Inference. In Verschueren, J. & Bertuccielli-Papi, M. (eds.) *The Pragmatic Perspectives: Proceedings of the International Pragmatics Conference* 61-129. Viareggio, 1985. John Benjamins.
- Levinson, S. C. 1989. A Review of Relevance. *Journal of Linguistics* 25. 455-472.
- 西山祐司 1992. 発話解釈と認知：関連性理論について 安西祐一郎他（編）『認知科学ハンドブック』 466-476. 共立出版.
- 西山祐司 1995. 言外の意味を捉える. 『言語』4月号. 30-39. 大修館書店.
- Sperber, D. and D. Wilson 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Wilson, D. and D. Sperber 1986. Inference and Implicature. In Travis C. (ed.) *Meaning and Interpretation*. 45-75. Basil Blackwell.